

参考資料

1. 年 表
2. 屋嶋城跡
3. 屋嶋城跡関連資料
 - a. 讃岐城山
 - b. 高松市内所在の古代の遺跡
 - c. 香川県内の古代の主要遺跡

年 表 國內外の情勢 讃 岐 国

西 曆	天 皇	年 号	古 代 山 城 記 事	國內外の情勢	讃 岐 国
660	齊明	齊明6		唐と新羅によって百済滅亡。天皇、百済救援の為の出兵を命じる。百済皇子豊璋の帰国を要請。	
661		齊明7		齊明天皇が難波を出発。齊明天皇崩御。	
663	天智	天智2	唐・新羅連合軍と倭国・百済遺民連合軍が白村江で戦い、倭国・百済遺民連合軍が大敗。		
664		天智3	對馬嶋・壹岐嶋・筑紫国等に防と烽とを置く。又筑紫に水城を築く。	冠位二十六階を制定。	
665		天智4	長門國に築城，筑紫國に大野・椽の二城を築く。		
667		天智6	倭國に高安城，讃吉国山田郡に屋嶋城，対馬國に金田城を築く。	近江大津京遷都。	屋嶋城築城。
668		天智7	難波に羅城を築く。	高句麗滅亡。中大兄皇子即位。	
669		天智8	天皇，高安嶺に登る。高安城の工事を一時中断する。高安城修理，畿内の田税を収む。	羅唐戦争（～676）。	
670		天智9	高安城修理，穀と塩を積む。又長門城一つ，筑紫城二つを築く。	庚午年籍の制作。	
671		天智10	達率谷那晋首（兵法博士）らに叙位。	天智天皇崩御。	山田郡の人の家で四足のひよこが産まれる。
672	天武	天武元	近江軍，高安城の税倉を焼く。三尾城を攻める。	壬申の乱。飛鳥浄御原宮遷都。	
673		天武2		大海人皇子即位。	
675		天武4	天皇，高安嶺に登る。高安城に幸す。兵政官の創設。		
679		天武8	文武官僚に対する兵器・馬の検閲と教習。		
680		天武9	竜田山，大坂山に関を置き，難波に羅城を築く。	吉野宮に行幸をし，皇后，皇太子と誓をたてる。	
681		天武10		淨御原令編纂開始。日本書紀編纂開始。草壁皇子が皇太子となる。	
682		天武11		天武天皇が新城に行幸する。	
683		天武12	兵法（陣法）の教習を指示。	難波京を副都とする。	国境の決定。
684		天武13	天武天皇の詔「政治の要は軍事である」。	八色の姓を制定。	南海地震。
685		天武14			
686		朱鳥元		天武天皇崩御。	

西 暦	天 皇	年 号	古 代 山 城 記 事	国内外の情勢	讃 岐 国
689	持統	持統3	筑紫に石上麻呂らを遣し、新城を視察させる。 天皇、高安城に幸す。	飛鳥浄御原令を施行。	伊予総領に讃岐国三木（御城）郡で捕獲した白燕を放し飼いにするように命じる。
690		持統4		持統天皇即位。唐庚年籍の制作。 藤原宮の地に行幸する。	
691		持統5		新益京で地鎮祭を行う。	
692		持統6		新益京（藤原京）の路を視察する。	
693		持統7	兵法（陣法）博士を諸国に遣わし、諸国に教習させる。		
694		持統8		藤原京遷都。	
697		持統11		文武天皇讓位	飢饉。
698	文武	文武2	大宰府に 大野・基肆・鞠智 の三城を修理させる。 高安城修理（翌年も同城修理）。	文武天皇即位。 渤海建国。	
699		文武3	大宰府に 三野・稻積 の二城を修理させる		
700		文武4	筑紫総領、周防総領、吉備総領ら任命。		
701		大宝元	大宝律令施行。 高安城 廃止。衛士増員。	大宝律令完成。 聖武、光明子誕生。	蝗の発生。
702		大宝2		大宝律令施行。遣唐使再開。 持統天皇崩御。	
703		大宝3			国司の巡視。
704		慶雲元			飢饉。
706		慶雲3			飢饉。
707	元明	慶雲4		文武天皇崩御。 元明天皇即位。	那賀郡の錦部刀良が帰国、衣、塩、粉を賜 る*。
710		和銅3		平城京遷都。	

*錦部刀良のほかに陸奥国信太郡の壬生五百足、筑後国山門郡の許勢部形見らが白村江の戦い時に唐軍の捕虜となっていたが、40年余りを経て粟田朝臣真人とともに帰国を果たす。

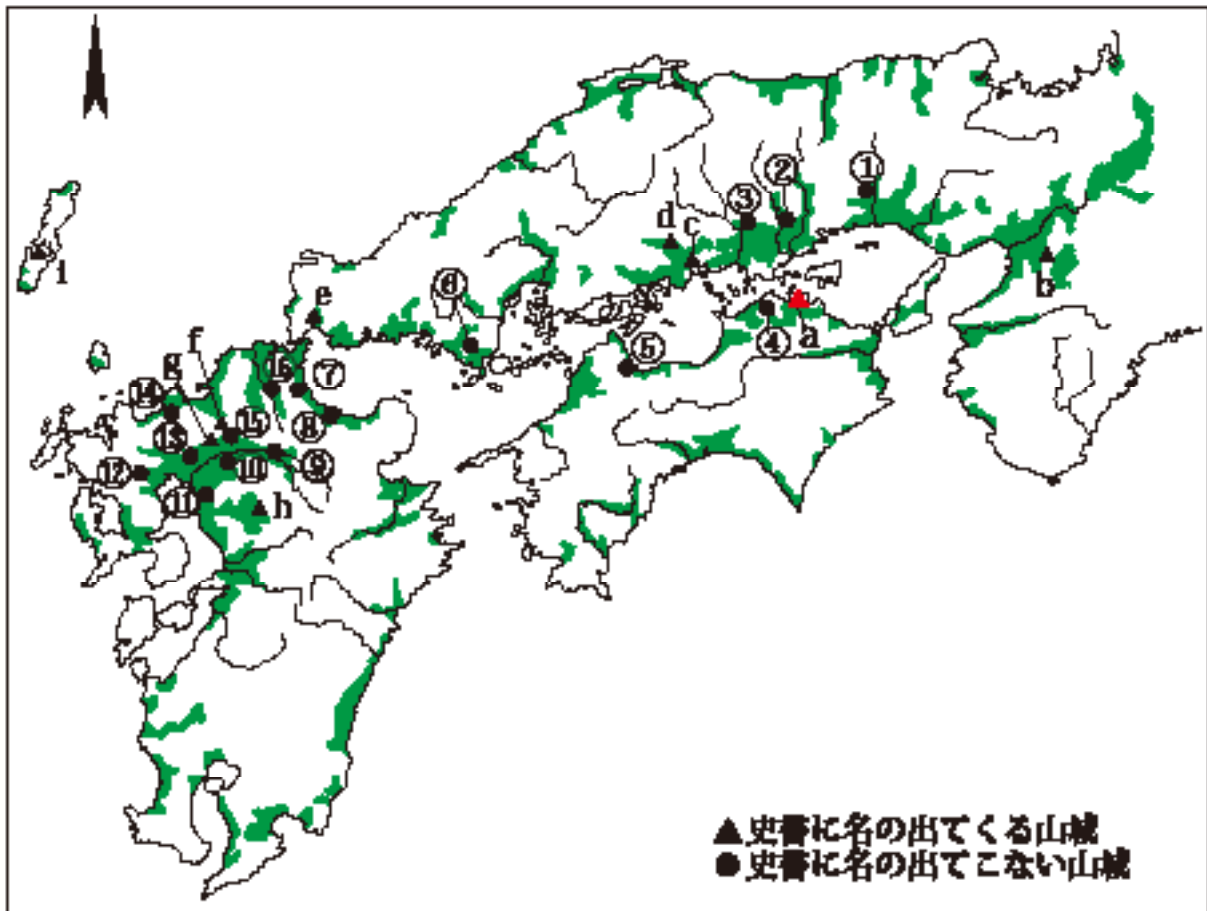


図1 古代山城分布図

史書に名の出てくる山城	史書に名の出てこない山城
a 屋嶋城	①播磨城山城
b 高安城	②大廻小廻山城
c 茨城	③鬼ノ城
d 常城	④讃岐城山城
e 長門城	⑤永納山城
f 大野城	⑥石城山神籠石
g 基肆城	⑦御所ヶ谷神籠石
h 鞠智城	⑧唐原神籠石
i 金田城	⑨杷木神籠石
	⑩高良山神籠石
	⑪女山神籠石
	⑫おつぼ山神籠石
	⑬帯隈山神籠石
	⑭雷山神籠石
	⑮阿志岐城
	⑯鹿毛馬神籠石

1. 屋嶋城跡

I) 築城背景と時期

『日本書紀』天智天皇6年条(667)に記載。
「是月築倭國高安城讚吉國山田郡屋嶋城對馬國金田城」

II) 立地

屋嶋城が存在する屋島は、近世に沖積作用と干拓によって陸続きとなるまでは、その名が示すとおり島であった。その構造としては、基盤が花崗岩、中腹から山上近くが凝灰岩、その上を安山岩が覆っている。そのため浸食が進まず、「メサ」地形を形成している。屋島の標高は293mであるが、山頂全域は280m前後で、北嶺と南嶺に分かれ、かろうじてやせ尾根で接続している。

III) 主要施設

1. 城壁(外郭線)

- ・屋島山上を取り巻くように城壁を廻らす(鉢巻形、テメ式)。
- ・総延長約7kmの内、1割程度が築かれた城壁(土塁・石塁)で、残りは自然の要害を利用している。
- ・城壁(外郭線)の外側にも城壁を配置している(浦生地区)。
例) 福岡県大野城跡の水城跡, 岡山県鬼ノ城の小土塁

2. 城門

- ・南西斜面に1箇所確認。古代山城では谷筋に門を設ける特徴があり、この他の谷筋にも未発見の門があった可能性がある。
- ・懸門(段差2.5m)構造で、内襲城(おうじょう)を備えており、朝鮮半島に直結する築城技術を用いている。
- ・門礎は未確認で、柱穴のみ確認。

3. 水門

- ・南嶺の2ヶ所(北水門, 南水門)を想定している。

4. 建物

- ・未確認であるが、北嶺, 南嶺ともに平坦地があり、存在した可能性がある。

5. 貯水池

- ・南嶺に瑠璃宝の池(血の池), 東斜面などに想定される。

6. 出土遺物

7世紀後半～8世紀の土器が城門地区, 浦生地区, 屋島寺での発掘調査で出土している。

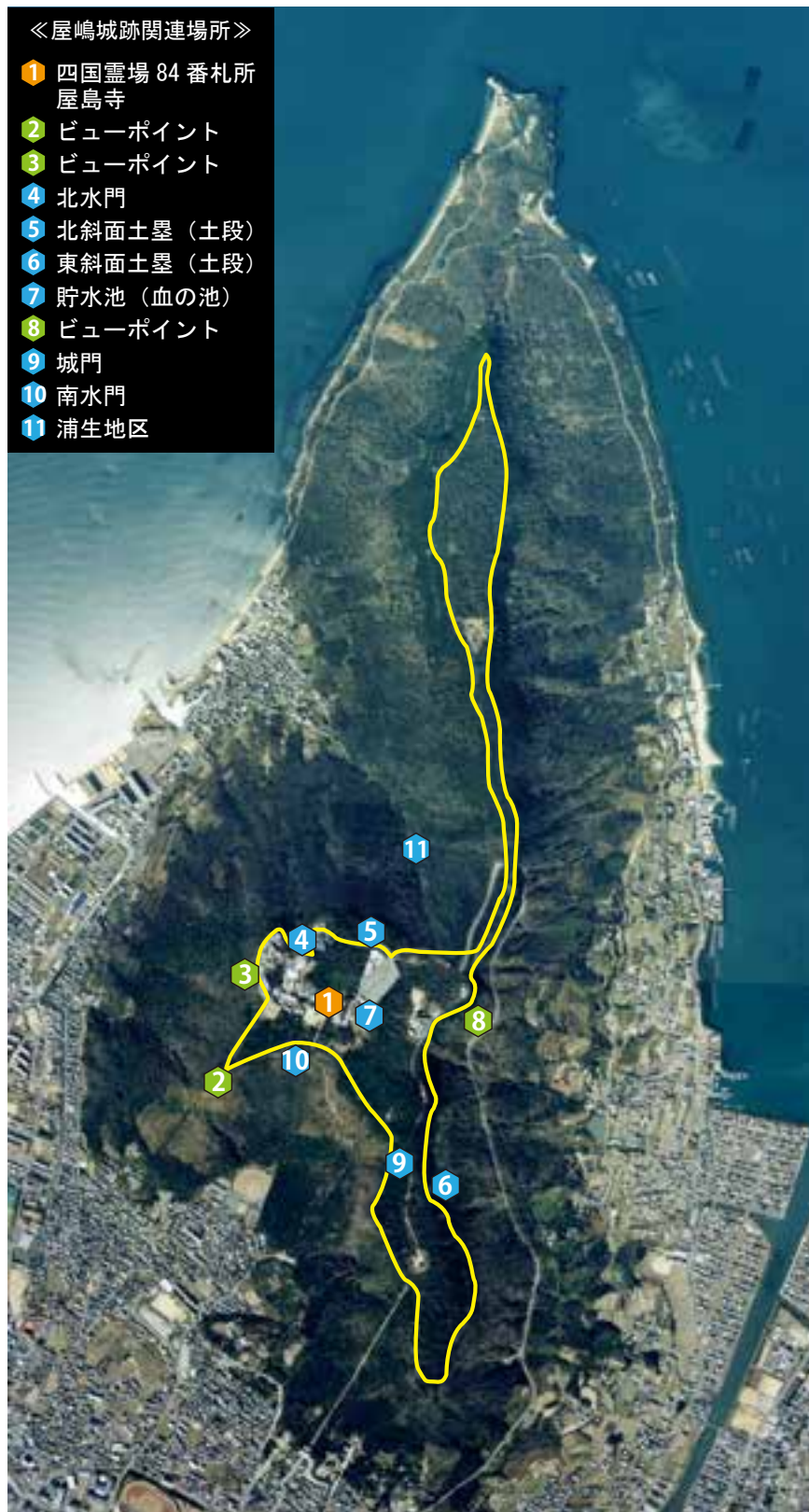


図2 屋嶋城跡城壁(外郭線)ラインと主要遺構

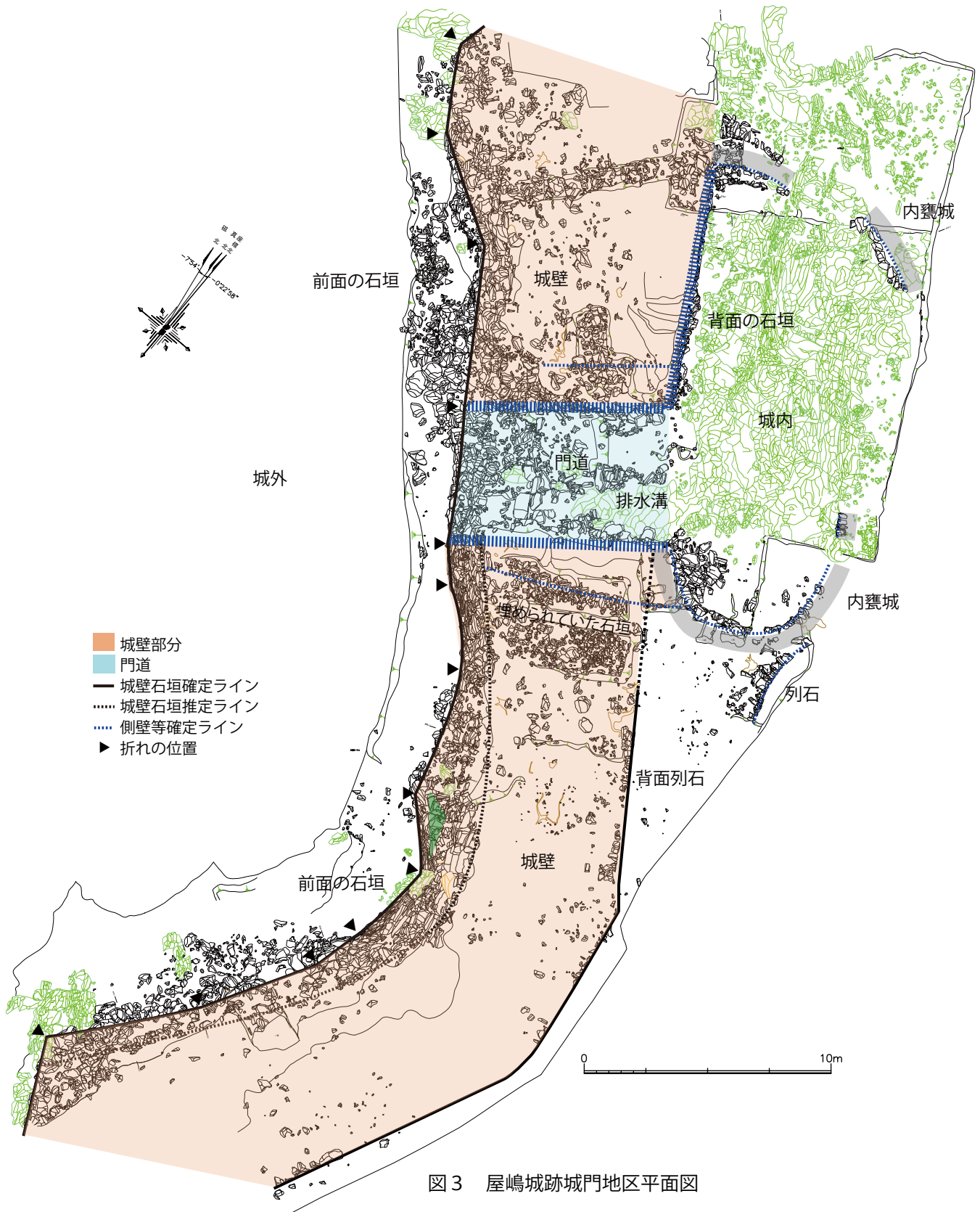


図3 屋嶋城跡城門地区平面図



図4 城門復元完成イラスト

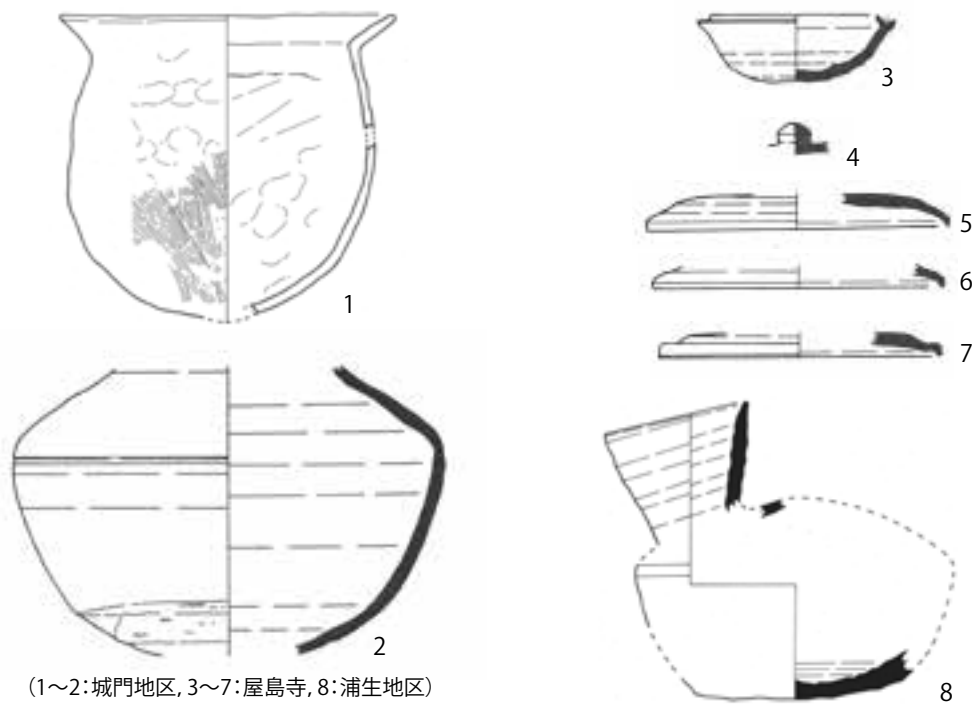


図5 出土遺物(S=1 / 4)

古代山城プレサミット



写真1 高石垣調査前



写真2 高石垣調査後



写真3 懸門



写真4 門道 (内側から)



写真5 城壁背面の列石



写真6 城門の内側で確認された列石 (おしじょう)



写真7 門柱の柱穴



写真8 南水門

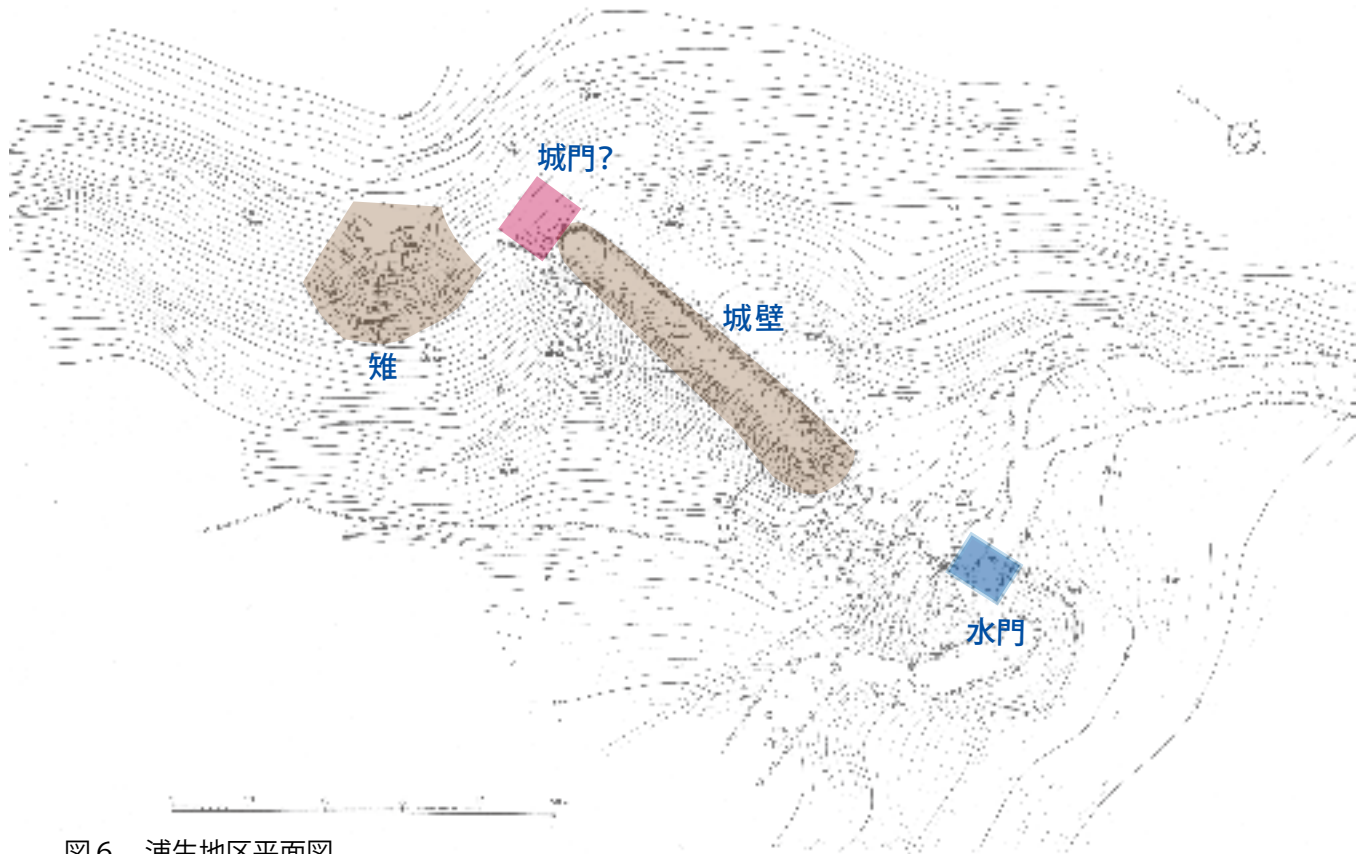


図6 浦生地区平面図

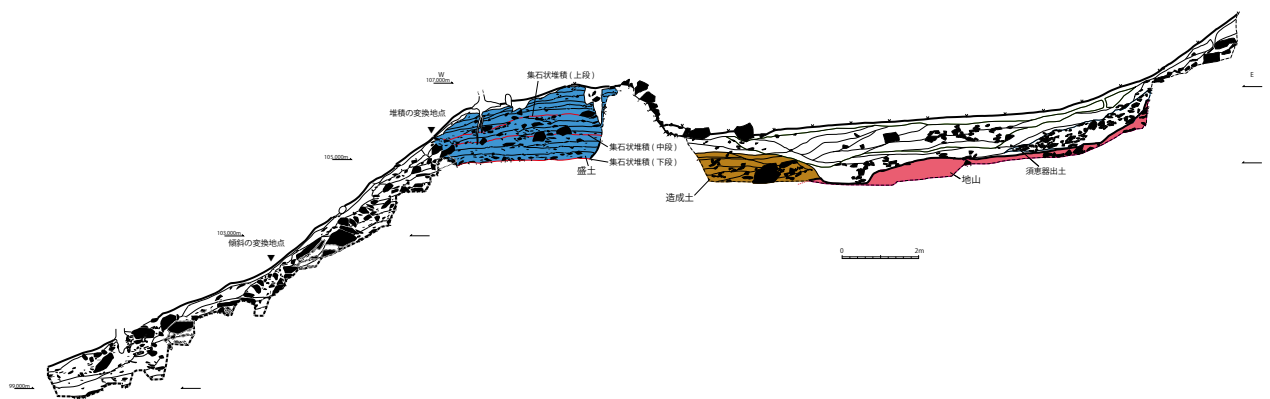


図7 城壁断面図



写真9 浦生地区城壁 (北から)



写真10 城門推定地 (北西から)

2. 屋嶋城跡関連資料

a. 讃岐城山（香川県坂出市）

I) 築城背景と時期

不明であるが、667（天智6）年『日本書紀』に讃岐國山田郡に屋嶋城が築かれたという記載から、讃岐国には他にも城があったことを示唆するものと考えられている。そのため、それが城山であった可能性が高い。立地が大野城と大宰府の關係に類似しており、讃岐国府との關係が指摘されている。

II) 立地

城山の標高は462mで、標高300m付近から下は急斜面をなし、山の北部と南西部に大きな谷がある。城壁はこの傾斜の変換点に築かれており、一部谷筋を横断しなければならない。

III) 主要施設

1. 城壁

- ・複郭構造をなし、内郭は石塁、外郭は列石をもつ土塁で構築する。谷を横断して城壁が構築されていると考えられる。複郭構造は大野城跡に類似する。

2. 城門

- ・北側に開けた尾根の頂上近くに所在する。
- ・各所に点在する唐居敷と門礎（製作途中）13個が点在しており、城門推定地となっている箇所がある。

3. 水門

- ・城門の南西方向の谷筋にある。その奥には貯水池と考えられる。

4. 建物

山頂部に礎石らしき巨大な石材が点在しており、礎石建物が存在した可能性がある。

5. 貯水池

- ・水門の奥に貯水池と考えられる池ノ内と呼ばれる箇所がある。

6. 出土遺物

- ・山頂から南西方向に下がる坂本バエと呼ばれる箇所や池ノ内から土器が出土している。

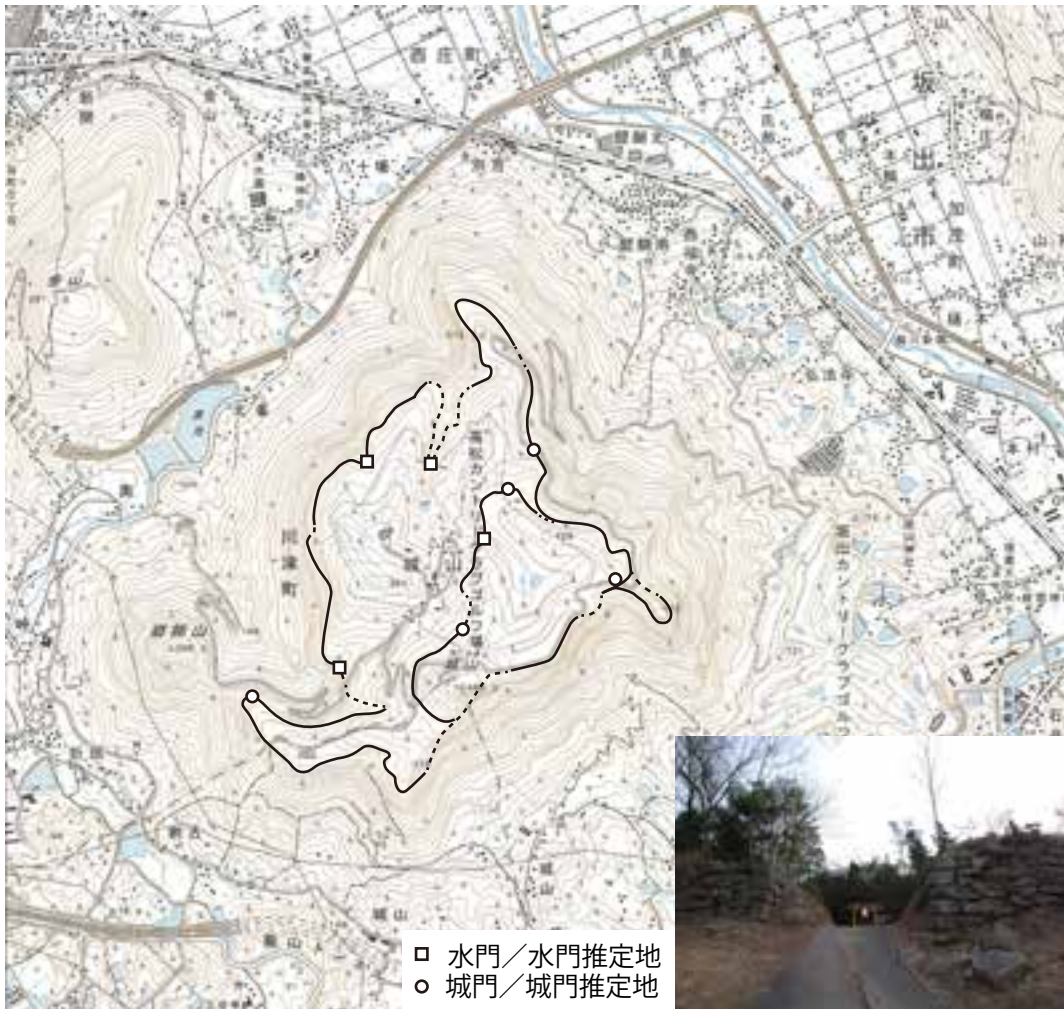


図8 讃岐城山城壁(外郭線)ラインと主要遺構



写真11 城門



写真12 城壁(石塁)



写真13 ホロソ石

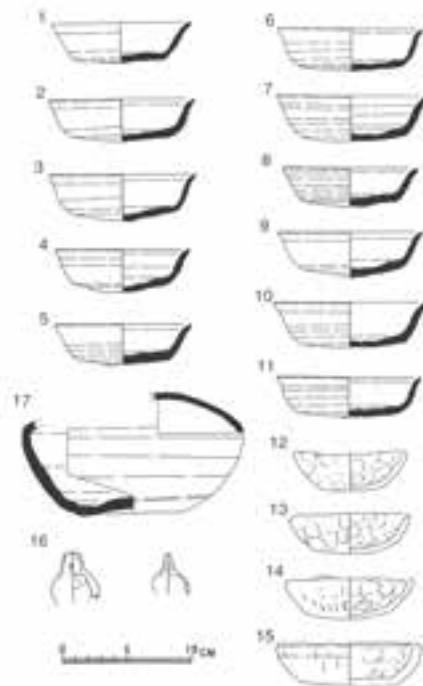


図9 出土遺物(S=1/8)

b. 高松市内所在の古代の遺跡（7～8世紀）

【小山南谷遺跡・新田本村遺跡】高松市新田町

8世紀前半頃の区画施設と付設する井戸跡などがあり、立地から屋嶋城跡との関係が指摘されている。8世紀から9世紀にかけての建物の主軸方位を共にする建物群が確認されているほか、硯、土馬、土鈴などの公的施設を示唆するような遺物が出土している。後述する前田東・中村遺跡とともに、7世紀代の周辺の状況が重要である。

【前田東・中村遺跡】高松市前田東町

掘立柱建物などが計画的に配置される範囲があるほか、斎串、人形、刀形の木製祭祀具、帯金具、土馬、陶印（寶）、硯、墨書土器なども多数出土しており、公的施設の可能性が想定されている。出土遺物から8世紀後半～10世紀を中心とした時期に機能していたと考えられる。ただし、7世紀から8世紀にかけての遺物が出土しているほか、7世紀後半の瓦が出土する宝寿寺跡等が近接しており、7世紀後半期の周辺の状況が重要である。

【奥の坊遺跡群】高松市高松町

7～8世紀にかけての掘立柱建物が確認されており、小山南谷遺跡・新田本村遺跡と同様な建物方位である。

【西下遺跡】高松市十川西町

7世紀代と考えられる掘立柱建物が確認されており、建物の建替え状況から、7世紀代に建物方向が南北方向を意識するようになっており、詳細な時期が不明であるが、周辺に位置する溝状遺構と建物遺構が南北方向をとり、平行することから、近い時期と考えられる。

【松縄・下所遺跡】高松市松縄町

7世紀後半に掘削され、8世紀後半まで使用されていたと考えられる南北に伸びる道路状遺構とそれに近接する掘立柱建物や柵列が確認されている。出土遺物としては土馬などがある。この道路状遺構は浪指神社付近へとつながると考えられ、御坊川河口周辺に津（港）の存在が想定されている。

【正箱遺跡】高松市檀紙町

8世紀から9世紀にかけての整然と配置された掘立柱建物が継続して営まれる遺跡である。

【空港跡地遺跡】高松市林町

7世紀代に条里地割と同じ方位の溝が施行され、8世紀後半～9世紀にかけて、区画の中に掘立柱建物が営まれる。

【屋嶋城と高松市内の古代の集落跡】

現状では、屋嶋城跡に直接関連する古代の遺跡は認められないものの、山城のみの造営とは考えられず、小山南谷遺跡、前田東・中村遺跡周辺に管轄施設や関連施設の存在を想定しておく必要もある。

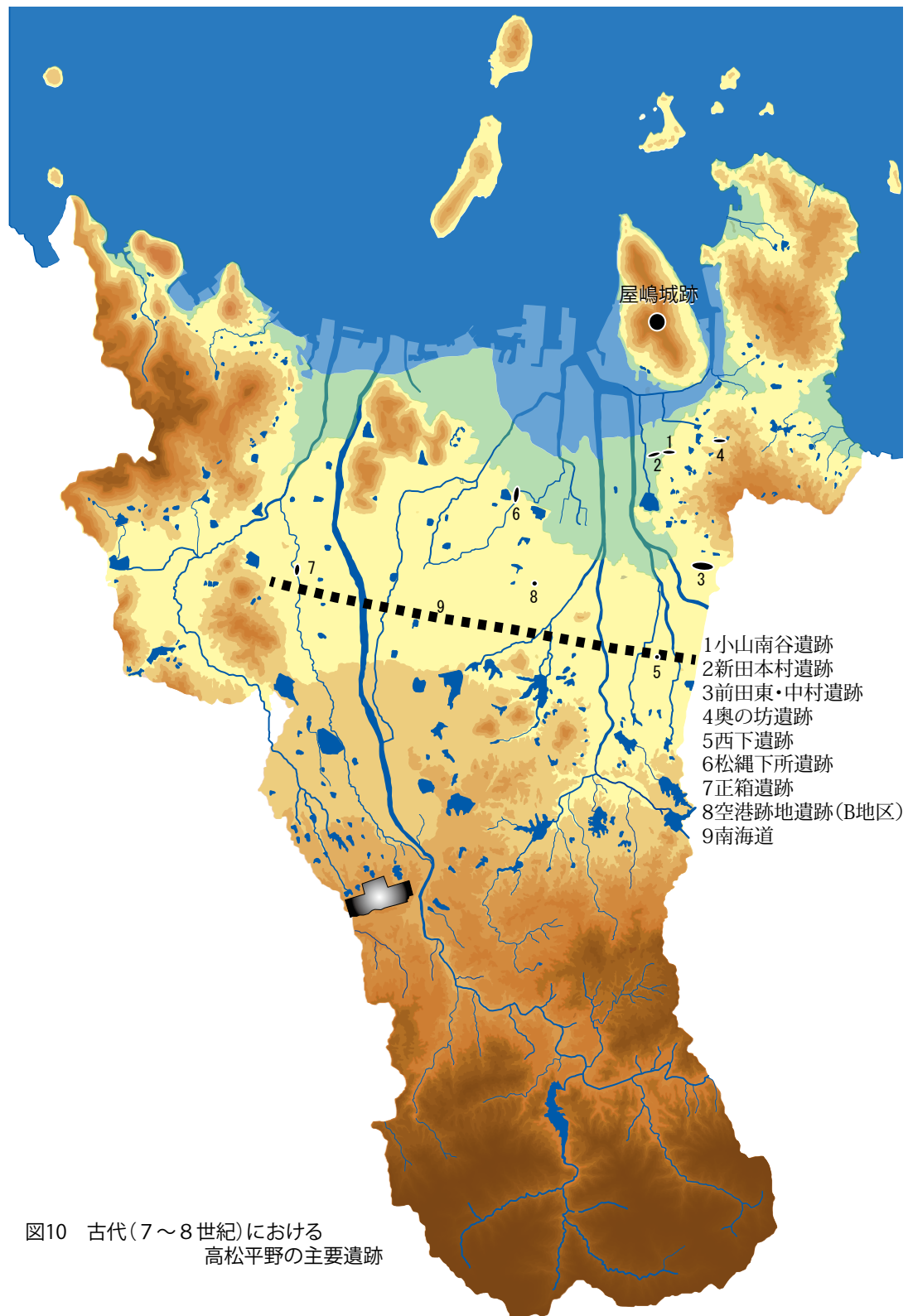


図10 古代(7～8世紀)における
高松平野の主要遺跡

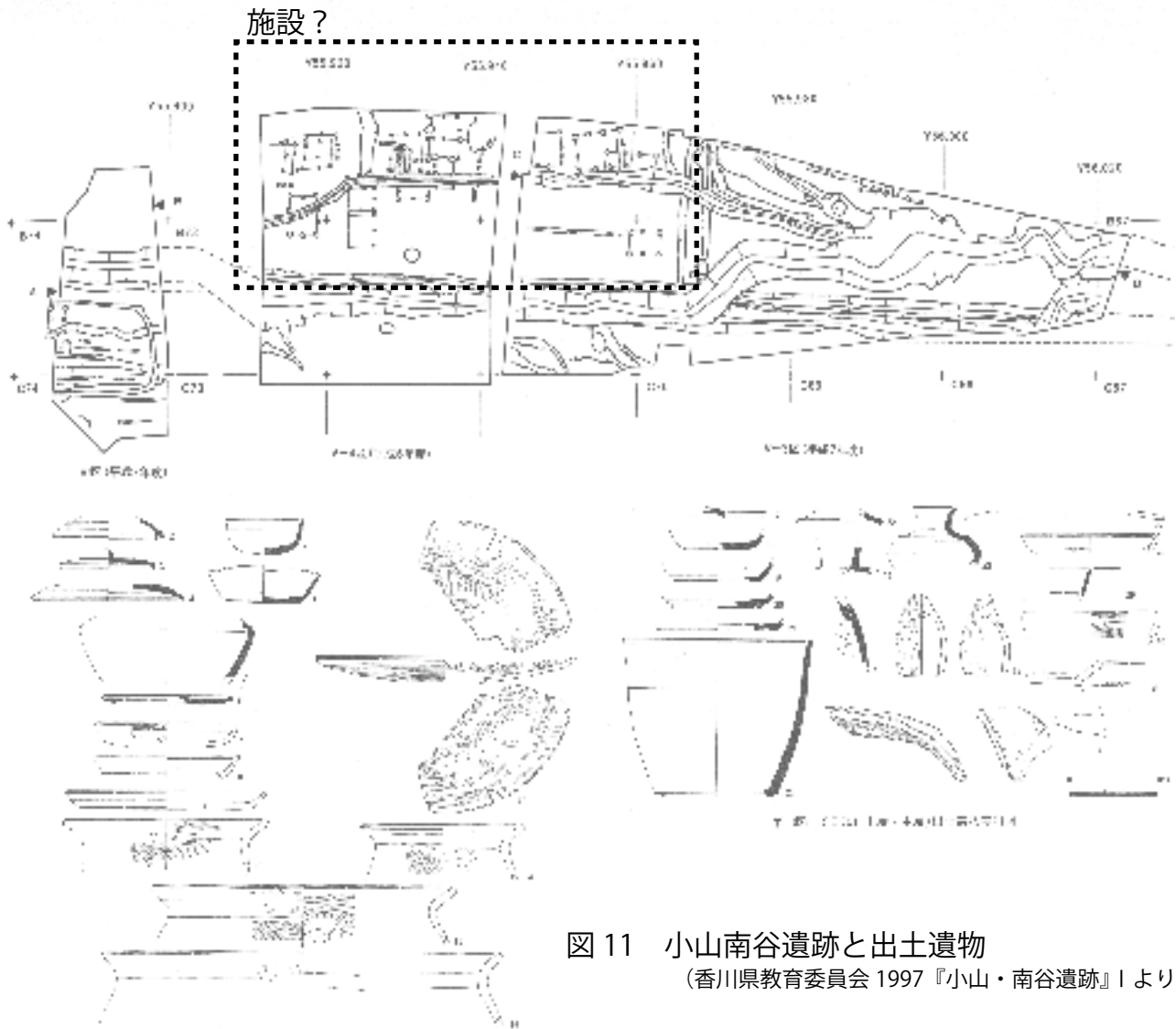


図 11 小山南谷遺跡と出土遺物
(香川県教育委員会 1997『小山・南谷遺跡』より)

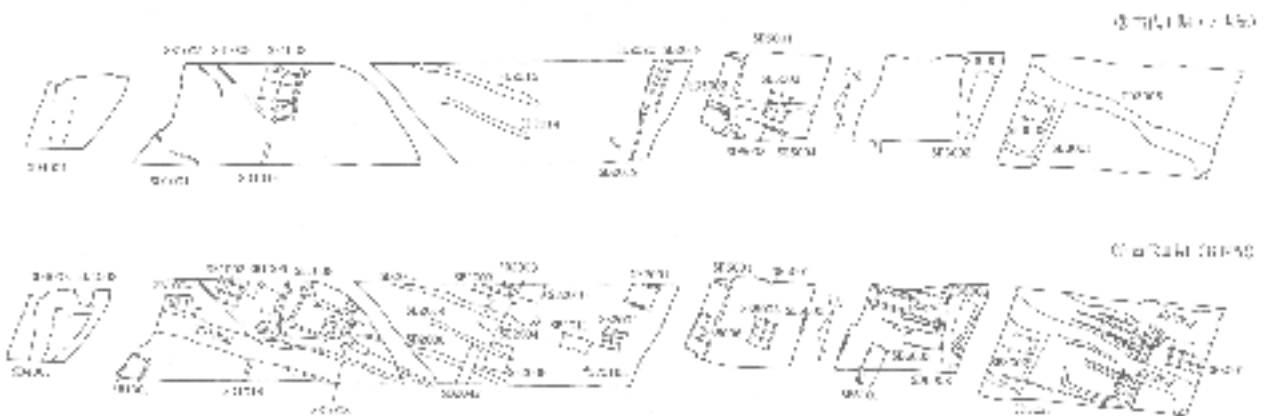


図 12 新田本村遺跡（7～8世紀の状況）
(高松市教育委員会 2006『新田本村遺跡』より)

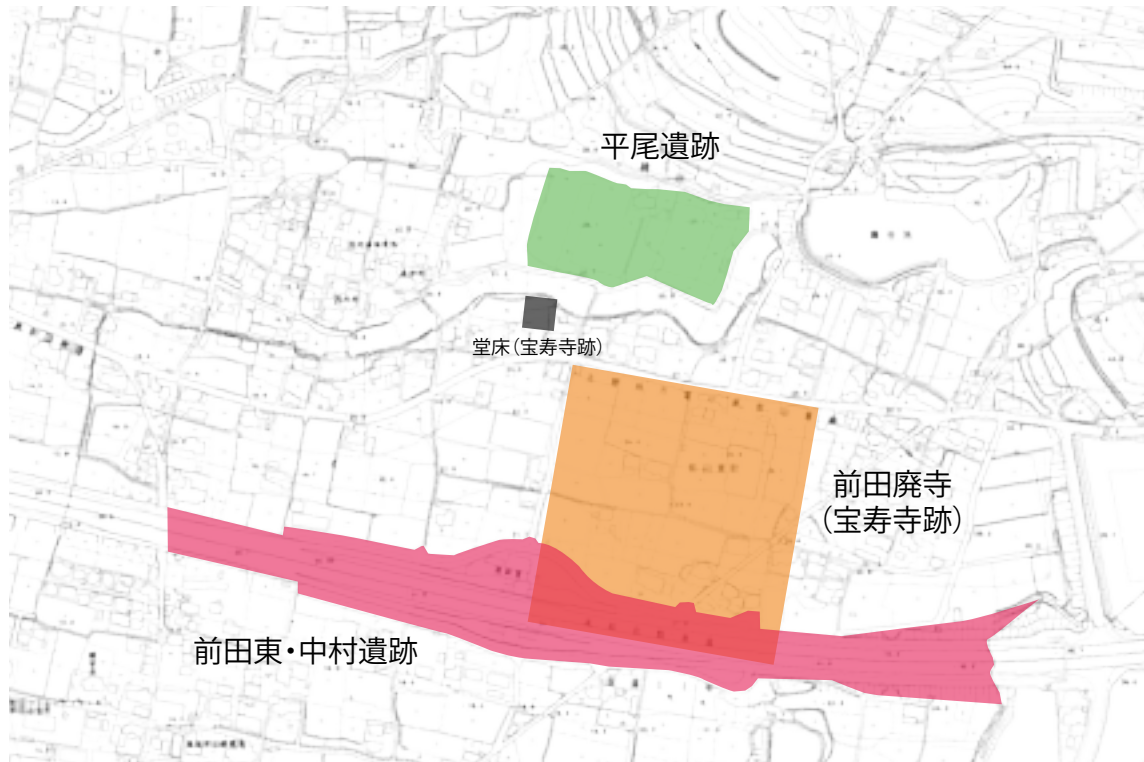


図13 前田東・中村遺跡と前田廃寺(宝寿寺跡) 前田廃寺跡の範囲は香川県教育委員会1995『前田東・中村遺跡』Iに基づく



図14 前田東・中村遺跡出土資料
(香川県教育委員会1995『前田東・中村遺跡』Iより)

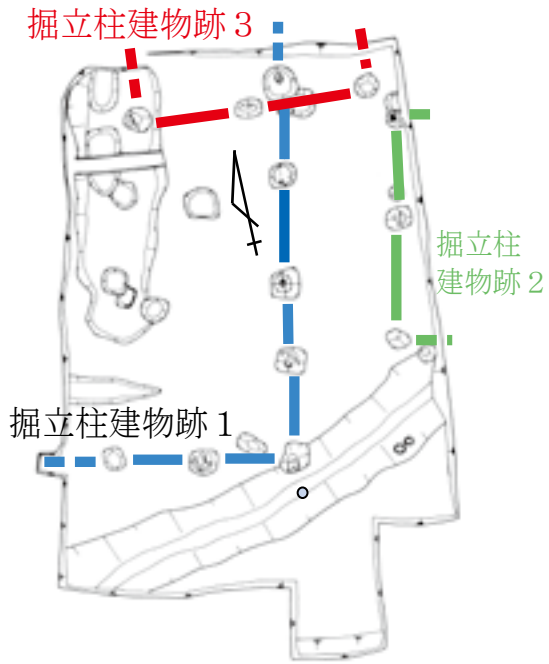


図 15 西下遺跡の掘立柱建物跡

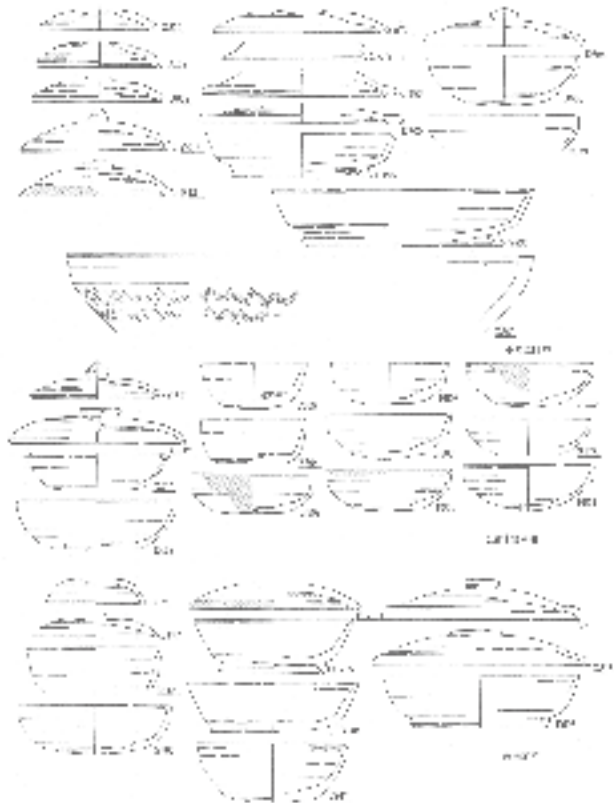


図 16 前田東・中村遺跡出土土器（7～8世紀）
（香川県教育委員会 2002『小谷窯跡・塚谷古墳』より）

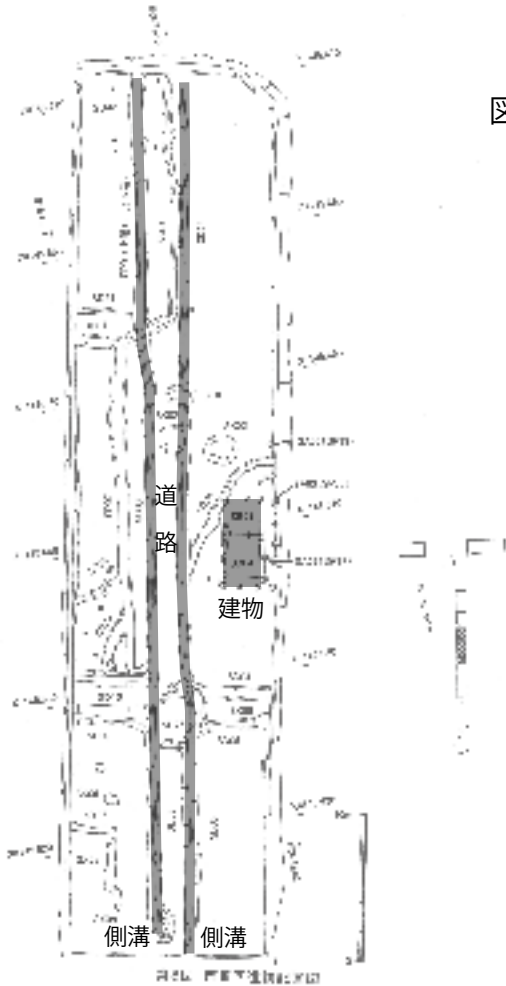


図 17 松縄下所の道路状遺構と掘立柱建物跡
と出土土器（高松市教育委員会 2001『松縄下所遺跡』）



c. 香川県内の古代の遺跡関連資料

I) 南海道関係

東かがわ市坪井遺跡は大内郡と寒川郡の郡境に位置し、南海道と考えられる両側に溝をもつ道路状遺構が確認されている。出土遺物から8～9世紀にかけて周辺に建物群が展開していたことが判明している。この他に、時期は下るが高松市三谷中原遺跡、高松市川原遺跡でも南海道と想定される道路状遺構が確認されている。さらに、西側では善通寺市四国学院大学構内遺跡でも南海道の側溝と想定される7世紀後半～8世紀の平行して走る溝状遺構が確認されている。

II) 駅屋関係

東かがわ市川北遺跡は7世紀後半から8世紀前半にかけての掘立柱建物が比較的密集して営まれている集落である。近隣に南海道引田駅が設置されたと考えられることから、駅戸集落の可能性が指摘されている。

III) 役所関係

讃岐国府跡は、坂出市府中町に位置し、昨年度確認された正方位の大型掘立柱建物のほか、築地塀、倉などの遺構が確認されており、ほぼ、国庁の位置が特定されつつある。坂出市下川津遺跡は6～8世紀にかけての大規模な集落遺跡で、立地から水運の拠点であり、物資の集積地として機能を担っていたと考えられる。この他に、水晶製の丸靱、人形模造木製品、斎串、硯、墨書土器、土馬などが多数出土しており、同時に公的施設としての役割も想定される。

善通寺市稲木北遺跡は、柵によって区画された空間に、「H」字形に規則的に配列した掘立柱建物群をもつ遺跡で、造営時期は8世紀初頭である。南海道に近接する善通寺市生野本町遺跡が多度郡衙に比定されていることから、稲木北遺跡は空間規模、建物規模、中心建物、規則的な配置状況から生野本町遺跡からの機能移転か、その出先施設としての想定がなされている。

坂出市川津一ノ又遺跡は9世紀前半を中心とする時期の掘立柱建物がコノ口の字状に配置されており、公的施設として推定されている。ただし、規模や規格性の観点から郡衙の出先機関として考えられている。

IV) 寺院関係

讃岐国内には、30ヶ寺以上の寺院が古代に建立されており、7世紀後半から8世紀にかけて、各郡に2～4の寺院が存在した可能性が高い（讃岐国分二寺を除く）。